

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：32670

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K21414

研究課題名(和文) イタリア・ファシズムにおける&lt;新しい女&gt;創出の試み

研究課題名(英文) An Attempt to Create &lt;New Women&gt; in Fascist Italy

研究代表者

山手 昌樹 (YAMATE, Masaki)

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号：70634335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イタリア・ファシズム体制(1922～43年)がどのような女性を理想とし、女性自身がその理想像をどのように受容したのかを明らかにすることを目的とする。この目的を達成するため、ファシスト党女性組織の機関誌に寄稿された女性ファシストの記事を分析した。その結果、ファシズム体制は、女性ファシストに対して、家庭で夫や子どものために尽くす良妻賢母のように、体制の福祉活動を通じて祖国に尽くすよう求めたが、女性ファシストはこの求めを女性の社会進出のために活用していったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study I analyzes how the italian fascist regime (1922-43) defined the ideal women and how fascist women considered that definition. Focusing on the organ of the fascist women's organization (Fasci femminili), I point out that while the fascist regime called for the women to contribute to the welfare works in the fascist party, they exploited this demand for the purpose of their advancement.

研究分野：イタリア近現代史

キーワード：イタリア ファシズム 新しい女 ファシスト党 女子教育

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1920年代半ばの欧米社会では「モダン・ガール」と呼ばれる女性たちが一世を風靡した。この女性たちは、少し遅れて日本をはじめアジア諸国でも注目を集めた。彼女たちは、都市型消費文化の担い手としてショートカットに丈の短いスカートを着こなすホワイトカラー層であった。

ヴィクトル・マルグリットの小説『ギャルソンヌ』によって示された、女性のこうした新しい行動様式は、もちろん各国の社会状況によって大きく左右された。

19世紀末に女性参政権運動が盛んになった英米においては、「モダン・ガール」が登場する以前に、既に伝統的価値観に縛られない女性が「新しい女」と呼ばれていた。一方、たとえば女性参政権運動が20世紀になって盛り上がりを見せたスペインにおいては、「モダン・ガール」が「新しい女」であった(磯山久美子『断髪する女たち』新宿書房、2010年)。このように「モダン・ガール」をめぐる「新しい女」との関係性が研究テーマのひとつになってきたが、いずれにせよ両者は、単に外見的な変化だけでなく、内面的な変化を伴い、近代化の過程で立ち現れてきたということが共通理解になっている。

この点でイタリアは興味深い。1920年代イタリアにおいても「マスキエッタ」(maschietta)と呼ばれるモダン・ガール現象が見られたが、それとは異なる文脈でファシズム体制が「新しい女」という言葉を用いたからである。『ギャルソンヌ』が出版されたまさに1922年に権力の座に就いたムッソリーニは、人口増加政策を推進するなかで「良妻賢母」を女性の理想像として掲げた。そして、この理想を体現する女性を「新しい女」と呼んで称揚したのである。

ファシズムと女性の関係は、1970年代に本格的な研究が開始された。研究対象は当初、ファシズム・イデオロギーに見られる女性観を中心としたが、1992年のヴィクトリア・デ・グラツィア『ファシズムはいかに女性を支配したか』を契機に女性の日常生活に関心が寄せられるようになった。そのなかで明らかにされたことは、行動や思想の自由を抑圧された被害者としての女性の側面だけでなく、体制に積極的に関与する協力者としての女性の姿であった(Victoria De Grazia, *How Fascism Ruled Women*, University of California Press, 1992)。

そして、とりわけ2002年にはファシスト党女性組織を対象とした実証研究が相次いで刊行され、その活動実態が明らかになった(Helga Dittrich-Johansen, *Le militi dell'idea*, Firenze: Olschki, 2002; Perry Willson, *Peasant Women and Politics in Fascist Italy*, London & New York: Routledge, 2002)。だが、それらの研究は成人女性を対象としており、未成年女子に関する情報は限定的であった。

ファシスト運動は「若さ」を強調し、ムッソリーニは世代交代とともに社会のファシスト化を達成できると常々語っていた。それゆえ教育に多大な関心を寄せ、青少年の内面にはたらきかけようとした。「新しい女」という言葉が登場するのはこうした文脈においてであった。

従来の研究は、ジェンダー規範に関してファシズムは伝統への回帰や過去への逆行であったと解釈してきた。それでは、なぜ伝統への回帰に「新しい女」という言葉をことさらに使用したのだろうか。そこには伝統的な女性像とは異なる要素が含まれていたのではなかろうか。

(2) 一方、筆者は、かつてファシスト党女性組織の活動実態を分析し、女性組織が体制の社会福祉事業を担い、体制に対する民衆の支持獲得に貢献していたことを明らかにした(山手昌樹「ファシズムの内面化 稲作労働者支援を事例として」『上智史学』第56号、2011年)。

この過程で具体例として取り上げたのが北イタリアの稲作地帯で除草作業に従事した女性農業労働者に対する支援事業である。この女性たちは主に10代後半から20代前半の未婚者であったが、ファシズム台頭前には、郷里を離れ出稼ぎに行くことで性的放縦になると批判されていた。そして、その批判的言説は、1920年代に欧米各国でなされたモダン・ガールに対する批判と多くの共通点を有していた(山手昌樹「近代イタリアにおける女性農業労働者の生活世界」『日伊文化研究』第46号、2008年)。

無論、都市と農村という違いや外見上の違いはあるものの、女性の家庭外労働や性的魅力のアピールに対する批判は共通していた。この点でかの女性労働者に対するファシズム体制の評価が実に興味深い。というのも、最新の研究において、彼女たちに対する評価が体制のプロパガンダ誌のなかで若さや美やセクシーさを肯定的に強調するものになってきたと指摘されているからである(Barbara Imbergamo, *Mondine in campo*, Firenze: Editpress, 2014)。したがって、ここからは建前としては女性に良妻賢母を求めつつ、実際には安価な女性労働力を維持するため、それとは異なる対応がなされていたと仮定することができよう。

## 2. 研究の目的

本研究は、以上の背景と成果を踏まえ、イタリア・ファシズム体制が女性にどのような振る舞いを求め、その理想と現実とのあいだでどのような調整を図ったのかを分析する。そして、ファシズム体制が称揚した「新しい女」を、これまでにヨーロッパ女性史研究が明らかにしてきた女性像のなかに位置付け、ジェンダー理論の発展に寄与することを目指す。

### 3. 研究の方法

(1) ファシズムと女性の関係をめぐる研究でいち早く分析対象になったファシズムの女性観は、主にムッソリーニの発言に依拠するものであった。一方、近年のファシズム研究は、各政策分野におけるサブリーダーの自立性を強調し、ムッソリーニが彼らの調停役として振る舞うことで絶対的な権力を維持したと指摘する。この点を踏まえるならば、ファシズムの女性観を明らかにするには、実際に女性政策に関与したファシスト幹部の考えを分析する必要があるだろう。そこで、まず教育政策を担ったファシスト幹部の著作や雑誌投稿記事を、次に実際に女子教育を担当したファシスト組織の機関誌を分析し、ムッソリーニの女性観とあわせて比較する。

(2) ファシズム体制は次世代のファシストを養成するため、青少年教育に多大な関心を寄せた。従来の研究もこの点を重視し、特にファシスト党の青少年組織を分析してきたが、その圧倒的多数は男子を分析対象に据えていた。本研究では、ファシスト党が設立した未成年女子のための組織を、機関誌や文書館史料を用いて、その活動実態や指導内容について明らかにする。

### 4. 研究成果

(1) 女性自身が「新しい女」をどのように定義したかを確認するため、ファシスト党女性組織の機関誌『イタリア女性評論』(*Rassegna femminile italiana*)を検討した。その結果、ムッソリーニの施政方針を受けてファシスト幹部や平党员、あるいは非党员、これらの各レベルで、しかも男女によっても女性観に温度差があることが明らかになった。

たとえば、男性が書いた「フェミニズムとファシズム」と題する1928年の記事は、まずこれらふたつのイズムがまったく両極にあることを指摘したうえで、フェミニズムが資本主義の発展によって誕生したと批判する。そのうえでホワイトカラーの仕事について、資本主義が発展した「今日、男性は自分ひとりが生きていくのにやっとの稼ぎしかないため結婚できない。(中略)女性はタイプリストが針子や帽子作りよりも価値があると考えている。しかし、服や帽子を作るには素質が必要なだけでなく、針子や帽子作りはタイプリストや教師よりも経済的に優れていると私は考えている。実際、家庭の良き母親が子どもの衣服や帽子のこしらえ方を知り、シーツの縫い方を知っていれば、男性の稼ぎはどんな家庭においても十分であろう」と記し、資本主義の発展に伴い女性が家庭外の労働に駆り出され、伝統的に家庭内でおこなわれてきた作業ができなくなり、既製品の購入でかえって家計が苦しんでいることを批判している。

ここに見られるとおり、当時、男性の圧倒的多数が女性の家庭外労働については否定的な見地を取っていたのである。

一方、同誌の女性編集長は、1929年に「新しいイタリア女性」と題する記事を寄稿し、女性の心構えを示した。その概要は、芸術や歴史や地理は、真の宗教心や道徳を満たすことのない単なる装飾に過ぎず誤った教育であると批判したうえで、新しい女性にはまず保健衛生、次に農業技術や社会性を教える必要があると説く。ここには教養軽視と実利偏重の教育観を見出すことができる。

そしてムッソリーニが必要とする真のイタリア女性は、以下の6つの真実を知っておかねばならないと説く。

第一に子どもには母親の愛情が必要であること。第二に幼児の面倒を見るだけでは不十分で真の母親は子どもが20歳になるまで見届けるべきこと。第三に家族の健康はすべて母親にかかっていること。第四に家庭での勤めは自分の家族のみならず、他の家族の模範ともなり、ひいては国民全体のためになるということ。第五に母親としての勤めは、国民に健全で丈夫な新世代の市民を保証するので、男性の優れた仕事に匹敵するということ。第六に母親としての労力を軽減できる特権階級の女性は、裕福でない階級の女性の負担を軽減する神聖な義務があるということ。

続けて女性編集長は、1925年設立の家庭看護講座が各女性の心に眠っている母性を呼び起こすものであり、すべての男性が兵士としての訓練を受けるように、すべての女性も学歴や家庭の状況に応じて16~18、18~20歳の2年間、母親や看護師になる訓練を受けるべきであると論じ、そうすれば、ファシズム体制の課題となっている人口問題や都市化の問題はたちまち解決すると主張した。

そして、労働、裕福、健全、民度は、国民の細胞である家族から始まる。女性だけが心と社会と産業のすべての業界をつなぐことができる。衛生学者、哲学者、司祭は必要な助言を与えてくれるが、母親だけが唯一自分の子どもに日々それを実践できるというような内容の記事を書いた。

以上の概要のなかでも真のイタリア女性が知っておくべき項目のうち、とりわけ6番目の点が注目に値する。ここではたしかに女性にファシスト国家へ奉仕するよう促しているだけのようにも思えるが、それまでの5項目と異なり、特権階級の女性に家に閉じこもっているのではなく、積極的に家庭外へ出ていくよう促しているようにも読み取ることができるのである。

この場合、家庭外とは社会福祉や慈善事業の分野に限定されるとはいえ、女性の政治的関与が厳しく制限されるなか、好意的に解釈すれば編集長が母性を重要視する体制イデオロギーを女性の社会進出の糸口として用いようとしたのではないかと指摘できるのである。

ここに女性ファシストが体制イデオロギーに忠実でありながらも、それをうまく読み換え、その結果、男性ファシストと女性

ファシストとのあいだで認識にズレが生じたことが読み取れるのである。

家庭外で活躍する女性たちは、良妻賢母を女性の理想像とする男性の主張を受容しつつ、自らの活動の場を確保する論理の組み立てを忘れなかったと指摘できよう。ファシストの「新しい女」たちは、女性ファシストによって家庭内だけでなく社会の良妻賢母として、家庭外での活動も積極的に奨励されたのである。

(2) ファシズム時代に教育を受けた人々が実際には当時、どのような考えを持っていたのか、1937年にローマ職業指導所が師範学校に属する約1,000名的女子中高生を対象として実施した意識調査を手がかりに分析した。その結果、ファシズム・イデオロギーが少女たちにほとんど浸透していなかったことが明らかになった。

彼女たちの意見はプロパガンダよりも周囲の環境、とりわけ親や学校の雰囲気が大きく影響されていた可能性が高い。だがその反面、彼女たちが小学校教諭となり、生徒を指導する立場になったとき、体制イデオロギーをうまく利用していくことも予想できる。というのも、(1)の点で取り上げた女性ファシストの事例からは、社会進出した女性が自身の専門性を活かすために体制イデオロギーを援用し、活動を根拠づけていた点を見出すことができたからである。

ファシズム時代に用いられた「新しい女」という言葉の背後には、伝統的な価値観への回帰とは異なるファシズム・イデオロギーの一端を看取することができる。それはまた、男性の創造した女性像が女性のイデオログを経由することで変容していく過程をも示しているのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

山手昌樹、北イタリア水田地帯の輪作体系と物質循環、農業史研究、査読有、51号、2017年、pp.14-22

〔学会発表〕(計2件)

山手昌樹、戦間期北イタリア丘陵地における女性の出稼ぎと家族関係、イタリア近現代史研究会4月例会、2017年4月22日、日本女子大学(東京)

山手昌樹、ファシスト女子の声、上智大学史学会第66回大会西洋史部会、2016年11月20日、上智大学(東京)

〔図書〕(計2件)

土肥秀行・山手昌樹(編著) ミネルヴァ書房、教養のイタリア近現代史、2017、pp.9-24、41-55、72、177-190

高橋進・村上義和(編著) 明石書店、イ

タリアの歴史を知るための50章、2017、pp.218-223、268-273

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

山手昌樹(YAMATE, Masaki)

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号: 70634335

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者 なし